

もう一つの『秋山紀行』——高野辰之と秋山郷(一)

大月 和彦

平家の落人伝説が伝わる秋山郷は、長野、新潟両県にまたがり、中津川の上流、苗場山と鳥甲山に挟まれた山間部に散在する小赤沢、屋敷、前倉など集落の総称。

文政年間に訪れた『北越雪譜』の著者鈴木牧之は、『秋山紀行』を著し、風俗、習慣などを紹介、秘境秋山郷が世に知られるようになった。

牧之の紀行から70年後の明治の中ごろ、長野師範の生徒高野辰之が秋山郷を探訪し

日記『秋山紀行』を雑誌『信濃教育』124号に掲載した。「故郷」や「朧月夜」などを作り、多くの著作を公刊した国文学者辰之の処女作だった。

原稿用紙20枚余の短編は未完のまま。難しい漢語を多く使った歯切れのいい文語体で、青年辰之の情熱と気負いが感じられる。

日記の冒頭に、コメができない秋山郷では、危篤な病人の枕元で、コメが入った瓢を振り、その音を聞いて往生するとか、村人が「禪を掩ひて山野を走る」などの風習や蛮風は、風評に過ぎない。家のつくりや着るものは世の中と大差ない。コメも少し取れるようになるなど「旧時の態」は全くない。飯山からわずか20里、苗場山の麓にある秋山郷にも明治の御代の世の光が及んでいると、強調する。

明治29年の夏、長野県永田村(中野市)の生家を発ち、飯山町から千曲川に沿っ

て北上し、下高井郡堺村(下水内郡栄村)の中心集落箕作で、秋山郷の菩提寺常慶院と維新前に庄屋だった島田家を訪ねる。当時秋山郷一帯を襲っていた凶作・飢饉の対策として県が進めていた官有林の払い下げ、米作や養蚕奨励などの救援策の実態を聴取した。

箕作から志久見峠を越えて新潟秋山の集落前倉(津南町)に入った。村人の体つきは雄々しく武者風で、各家には数本の槍刀があるという。

ある家で桐箱にはいった陶器を見せてくれる。小松内府の座右にあり、内府が近くの矢櫃に逃げてきたときのものという。帰りに貴重なお茶を「馳走になる」。

おもひきや深山の奥にたしね来て

宇治のかほりをみにしめんとは